

ダニエル書9章1-19節 「主への告白の祈り」

1A エレミヤの七十年預言 1-2

2A 主への告白 3-14

1B 大いなる神、契約を守る方 3-4

2B 罪を犯した民 5-6

3B 神の義と不面目な民 7-8

4B 律法にある呪い 9-12

5B 主に願わない過ち 13-14

3A 主への哀願 15-19

1B ご自分のものとされた民 15-16

2B 荒れ果てた神の聖所 17

3B 御名の付けられた都 18-19

本文

ダニエル書 9 章を開いてください。私たちはこれまで、ダニエルの見た、四頭の獣、そして、雄羊と雄山羊の幻を見てきました。その中で、荒らす忌まわしい者の現れが浮き彫りにされています。そして9章です。ここが、ダニエルの預言で、多くの人に知られた箇所になっていると思います。七十週の預言、その最後の週における、荒らす忌まわしい者の現れがあります。そして、ここにはメシアが来られて、この方が絶たれる預言までがあり、それが私たちの主イエスにあって成就したことを示す、とてつもない箇所でもあります。

1A エレミヤの七十年預言 1-2

しかし、その幻は、ダニエルが、これまでのイスラエルの犯した罪を真摯に告白し、悔い改めていた中で与えられたものです。それは、彼より少し先に、主に遣わされた預言者、エレミヤが預言した七十年の捕囚の期間の預言がありました。そのことを思いながら祈っている時に、神は、ダニエルの願いに応える、七十年ならず、七十週の聖所の回復の約束を与えられたのです。

¹ メディア族のクセルクセスの子ダレイオスが、カルデア人の国の王となったその元年、² すなわち、その治世の第一年に、私ダニエルは、預言者エレミヤにあった主のことばによって、エルサレムの荒廃の期間が満ちるまでの年数が七十年であることを、文書によって悟った。

時は、ダレイオスが王になったばかりの元年です。5 章の出来事を思い出してください。バビロンの王ベルシャツザルが殺されてからダレイオスが王となり、そこでダニエルは大臣になりました。紀元前 538 年頃だと考えられます。前回見た 8 章の幻は、ベルシャツアルの治世第三年で、12-3

年経ってからのことです。

その時、ダニエルはエレミヤの預言を読んでいました。私たちはここで、ダニエルがどのようにして神を知ったかの、信仰の継承を認めることができます。彼の両親が神を敬う人々であったと思いますが、彼がまだ少年の時、エルサレムにいた時に、他のすべての人を敵にしてまで、神のことばを伝えていったエレミヤがいたのです。

エレミヤは、エルサレムの町がバビロンによって完全に破壊されるまで預言し続け、破壊された後も残されたユダヤ人によって、無理やりエジプトに同行させられました。ですからその巻き物はエジプトにおいて完成したものと思われませんが、何らかの形で、メディア・ペルシアの地にいるダニエルの手に渡っていました。エルサレムから逃れた民が、もしかしたらエレミヤ書の一部を持ってきたのかもしれませんが。あるいはバビロンから解放されたユダヤ人で、エジプトにいた人が巻き物を持ってきたのかもしれませんが。ダニエルにとって、エルサレムで孤高な預言活動をしていた人として見聞きしていたことでしょう。この預言者が一体何を語っていたのか、その全貌を知ることができると思って、入手した巻き物をすぐに開いて貪り読んでいたことでしょう。そうしたらここにあるとおり、「エルサレムの荒廢の期間が満ちるまでの年数が七十年であること」を知ったのです。

実際の箇所を読んでみましょう。「29:10-14 まことに、【主】はこう言われる。『バビロンに七十年が満ちるころ、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたにいつくしみの約束を果たして、あなたがたをこの場所に帰らせる。11 わたし自身、あなたがたのために立てている計画をよく知っている——【主】のことば——。それはわざわざではなく平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。12 あなたがたがわたしに呼びかけ、来て、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに耳を傾ける。13 あなたがたがわたしを捜し求めるとき、心を尽くしてわたしを求めらるなら、わたしを見つける。14 わたしはあなたがたに見出される——【主】のことば——。わたしは、あなたがたを元どおりにする。あなたがたを追い散らした先のあらゆる国々とあらゆる場所から、あなたがたを集める——【主】のことば——。わたしはあなたがたを、引いて行った先から元の場所へ帰らせる。』」

ここで大事なのは、七十年の「計画」はあるのですが「わたしに呼びかけ、来て、わたしに祈るなら」、また「心を尽くしてわたしを求めらるなら」という条件が付いていることです。計画なのですから、自動的に神がそうしてくださるものであると考えてしまいがちです。「神さまがそうするって言うのなら、そうなるのだから、なぜ祈る必要があるの？」と考えるかもしれませんが。けれども、神は、祈りと願いによる積極的な関わりによって初めてその実現を見ることができるという条件を付けておられたのです。チャック・スミスは、「神の計画は必ずその通りになりますが、神の御業は祈りを通して見ることができます。」と言いました。神はご自分のことを行われるのに、私たちの助けを必要としません。しかし、神は私たちをこよなく愛されているので、私たちにそのご計画の中に

入って、その御業と栄光を見てほしいと願われています。

ところでこの「七十年」という期間ですが、ダニエルにとって捕囚生活は約68年経っていました。バビロンに捕え移されたのが紀元前605年のことです。七十年後は535年あるいは536年です。今は538年ですから約2年後に成就します。エズラ記によればキュロス王の第一年に、彼がユダヤ人に対してエルサレム帰還の布告を出しました。ですから、もう間もなく帰還が始まる動きが出て来るということを彼は悟ったのです。そこで彼は祈りのために、膝をかがめたのです。このようにして、ダニエルの祈りが神の約束を聞いて、それによって心を動かされたものでした。御心になかった祈りとは、御言葉に触発される祈りです。

ところで、ダニエル書6章で、ダレイオスが王である時、王以外に祈願する者は、だれでも獅子の穴に投げ込まれるという法律の文書に署名がされても、それでも、ダニエルは、自分の家に帰って祈っていたことが書かれています。「6:10 ダニエルは、その文書に署名されたことを知って自分の家に帰った。その屋上の部屋はエルサレムの方角に窓が開いていた。彼は以前からしていたように、日に三度ひざまずき、自分の神の前に祈って感謝をささげていた。」ここで彼は、ソロモンが神殿奉獻をした時の祈り、罪を赦していただくための祈りを思い出していたに違いないです。それだけでなく、エレミヤの預言を読んだからということができるでしょう。

そして、エレミヤ自身のことを思います。エレミヤは、だれもが聞き入れない状況の中で預言をしていました。しかし、神からの叱責を聞く知恵ある者が全くいなかったのではありません。ここに、神のみことばを忠実に伝える必要性を覚えます。人々が健全な教えから離れていく時代になると、パウロはテモテに話していましたが、たとえ時が悪くても、しっかりとみことばを宣べ伝える必要があることを覚えます。

2A 主への告白 3-14

1B 大いなる神、契約を守る方 3-4

³ そこで私は、顔を神である主に向けて断食をし、粗布をまとして灰をかぶり、祈りと哀願をもって主を求めた。

彼は、祈るための心備えをしっかりと整えました。まず、「顔を神である主に向けて」祈ったとあります。そして、「断食を」したとありますが、それは肉を養うこと以上に霊を養う行為です。食事のため、一日の多くが割かれてしまいます。それを主に心に向けるために行ないます。次に、「主を求め」ています。はっきりと主からの答えがあることを期待して、祈り通そうとしています。そしてダニエルは「粗布をまとして灰をかぶ」って、祈り、哀願しています。これは、悲しみや嘆きの思いの表れであり、自分を卑しめる行為です。彼はこれから、主に対して罪を告白する祈りを献げます。

⁴ 私は、私の神、主に祈り、告白した。「ああ、私の主、大いなる恐るべき神。あなたを愛し、あなたの命令を守る者には、契約を守って恵みを下さる方。

ダニエルの祈りは「呼びかけ」から始まりました。エレミヤ書を読んでいて、ユダヤ人が世界に散らばっているのがまさに神の御言葉の通りになっていることを悟りました。そして神が世界中から彼らを連れ戻すという約束まで与えておられることを知りました。それで、「ああ、私の主、大いなる恐るべき神。」と驚いています。

そして彼は、「あなたを愛し、あなたの命令を守る者には、契約を守って恵みを下さる方。」と言っています。主が、力に満ちただけではなく、契約にしたがって真実な愛を示される方、恵みを施される方です。異教の神々は、次になにをするか分からないから、その怒りを宥めようとして、犠牲を払ったり、祈ったりします。けれども、まことの神は違います。大いなる力があるだけでなく、ご自分の約束してくださったことに自ら縛られている方です。エルサレムが荒廃しているということに対して、「神は不在だ」とも思わなかったし、「神は意地悪している」とも思いませんでした。神の契約の中でこれらのことは起こっており、その中で神は恵み深い方なのだとことを彼は良く知っていました。私たちにも、同じ約束が与えられていますね。神を愛する者には、神はどうしてくださるでしょうか？「ロマ 8:28 神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」

このようにして、ダニエルは自分が誰に祈っているかを明確にしました。これが祈りの始めであり基本です。使徒たちが、ユダヤ人の議会でイエスの教えをしてはならないと脅された時に、そのことを聞いた仲間たちは、「主よ。あなたは天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造られた方です。(使徒 4:24)」と祈り始めました。目の前にある脅しに対して、神は何でもできる方なのだとことを、そのように言い表したのです。

2B 罪を犯した民 5-6

⁵ 私たちは罪ある者で不義をなし、悪を行って逆らい、あなたの命令と定めから外れました。

ダニエルは、主に呼びかけて罪を告白しています。彼は、エルサレムが荒廃していること、その聖所が廃墟となっていること、民が離散の地で虐げられていることを悲しんでいました。けれども、それ以上に悲しんでいたのは、主に対して罪を犯していたことです。エレミヤの預言を読んで、ますますそのことが明らかにされたのでしょう。まず、「罪ある者で不義をなし、悪を行って逆らい」と言っていますが、これは神との関係を自らが損なったことを悲しんでいることです。そして、「あなたの命令と定め」から外れたのですが、命令は、神の教えのこと。定めは、その命令の生活に対する具体的な適用です。これらから外れました。エレミヤの預言もそうでしたが、状況が良くなることを人々が願い求めましたが、そこに焦点が行ってはならず、神との関係を私たちが損なうことを行

っているから、これこれのことが起こるのだと預言者は語っていたのです。

そしてダニエルは、そこで自分の祈りが聞かれること、すなわち、聖所が回復して、エルサレムも再建されることについて願いを求めるのですが、それが全く、そうしていただける価値など全くないし、それどころか、今のようにエルサレムが廃墟となり、聖所が荒らされているのは、まさに神の正しい裁きの現われであることを認めているのです。主が回復してくださるのであれば、それは全く神ご自身の憐れみによってだけなのだと思っています。

私たちはこの前の礼拝で、コリント第一 11 章 31 節で、「もし私たちが自分をわきまえるなら、さばかれることはありません。」という言葉を見ました。自分自身のことをわきまえ知ること、これがあって、初めて神の憐れみを受けることができます。そのわきまえ知る行為が、まさにダニエルがこれから献げる、罪の告白です。「告白する」というのは、「相手の言っていることに同意する」という意味です。神が、これを行ってはいけないと言われていることについて、「その通りです」というのが告白です。神が罪とするものを罪だとみなすことです。主は慈しみ深い方ですから、罪を言い表す者を赦してくださいませ。「1ヨハネ 1:9 もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」

⁶ 私たちはまた、あなたのしもべである預言者たちが、御名によって私たちの王たち、首長たち、先祖たち、民衆すべてに語ったことばに、聞き従いませんでした。

ダニエルは、エレミヤの預言のことが心にあります。あらゆる階層の人々が罪を犯していることを、エレミヤは語っていました。

それから、ダニエルは「私たち」という主語にしています。ダニエルが、何か具体的に悪いことをした記述は見当たりません。けれども彼は、自分も入れて「私たち」と言っています。これが執り成しの姿です。ダニエルは、自分自身をユダの民から引き離すことはできなかつたのです。神に与えられた愛のゆえに、自分はユダヤ人であり、神の民として選ばれていることから切り離すことができませんでした。このようにして、愛の律法によって、互いの重荷を担い合うのです。

3B 神の義と不面目な民 7-8

⁷ 主よ。義はあなたにあります。顔をとおう恥は私たちにあります。今日あるとおり、それはユダの人々、エルサレムの住民にあり、また、近くであれ遠くであれ、あなたが追い散らされた先のあらゆる国々にいる、すべてのイスラエルにあります。彼らがあなたの信頼を裏切ったためです。⁸ 主よ。顔をとおう恥は私たちにあり、私たちの王たち、首長たち、および先祖たちにあります。私たちはあなたに対して罪を犯してきました。

ダニエルは、今のイスラエルの民の悲惨な状態を、決して神のせいにすることはありませんでした。事実、神は正しい方であり、顔を覆うような恥は自分たちにあるのです。人は、自分たちの罪によって起こっていることなのに、その罪を認めないどころか、その悲惨な状況について、「なぜ、神はこんなことを許されるのか」と神を非難することさえあります。エレミヤ書にも、エルサレムの残された民が、天の女王の犠牲を供えたことを悔い改めないどころか、バビロンに滅ぼされたことを、次のように弁解しています。「エレ 44:18 だが、天の女王に犠牲を供え、それに注ぎのぶどう酒を注ぐのをやめたときから、私たちは万事に不足し、剣と飢饉に滅ぼされたのだ。」しかし、神は正しい方であり、その裁きも正しいのです。パウロが、ロマ 3 章でこう論じています。「3:3-4 では、どうですか。彼らのうちに不真実な者がいたなら、その不真実は神の真実を無にするのでしょうか。4 決してそんなことはありません。たとえすべての人が偽り者であるとしても、神は真実な方であるとすべきです。「それゆえ、あなたが告げるとき、あなたは正しくあられ、さばくとき、勝利を得られます」と書いてあるとおりです。」

そして、ダニエルは、この罪が一回性もの、軽々しいものではないことを告白しています。最後にバビロンに捕え移されたユダの民だけではなく、既にアッシリアに捕え移されていたイスラエル十部族の者たちも含めています。そして、今の時代の者たちだけではなく、イスラエルが古くから、先祖たちから犯していたと告白しています。そして、王たち、首長たちといって、あらゆる社会階級の人たちも罪を犯したと告白しています。ダニエルは、理解していました。バビロン捕囚というのが、神のイスラエルに対するご計画において、ご自分の民に怒りを示されるものとして、特別に定めておられた出来事であることを知っていたのです。

4B 律法にある呪い 9-12

⁹あわれみと赦しは、私たちの神、主にあります。まことに、私たちは神に逆らいました。

義は神のものでし、また憐れみと赦しも神のものです。ダニエルは、15 節以降に、自分たちが正しいからではなく、神の一方的な憐れみのゆえに、エルサレムを回復してくださいと願います。しかし、まだまだ、自分たちの神への反逆について告白しきれしていません。また、これまでも、神は憐れみと赦しに富んだ方であるのに、これまで長いこと、その憐れみを侮って、神に逆らい続けました。パウロが、次のようにロマ 2 章で語ったとおりです。「2:4-5 それとも、神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かないつくしみと忍耐と寛容を軽んじているのですか。5 あなたは、頑なで悔い改める心がないために、神の正しいさばきが現れる御怒りの日の怒りを、自分のために蓄えています。」

¹⁰私たちは、私たちの神、主の御声に聞き従わず、しもべである預言者たちによって神が私たちに下さったみおしえにも、従って歩むことをしませんでした。

ダニエルにとって、ユダの王国時代、数々の預言者が現れて、そこで主に立ち返って、憐れみを受けるようにという説き伏せがあったのにも変わらず、それでも主のみ教えに聞き従おうとしなかったことを述べています。けれども 11 節以降には、それ以前に、初めに主の教えが与えられた、モーセの時に警告されていたことに基づいて、今、降りかかっている災いがあることを次に述べます。

¹¹ イスラエルはみな、あなたの律法を犯して離れ去り、御声に聞き従いませんでした。そのため、神のしもべモーセの律法に書かれているのろいの誓いが、私たちの上に降りかかりました。私たちが神の前に罪ある者であったからです。¹² 神は、大きなわざわいを私たちにもたらすことで、かつて私たちと、私たちを治めた指導者たちに対して告げられたみことばを成就されたのです。エルサレムの上に下ったほどのわざわいは、今まで天下になかったことです。

「律法」というのは、ヘブル語でトーラ、「教え」という意味です。彼らを教えて、この道に歩みなさいと命じておられたものです。それを主はモーセによって与え、それから数々の預言者がその教えに基づいて、主から言葉を預かり、それを宣べ伝えていました。そして、主はモーセがこの世を去る直前、モアブの草原において申命記という、最後の説教を与えました。そこで、これから入る約束の地に入ってから、ご自分の教えから離れてしまったらどのようなになってしまうのかを予め、伝えておりました。ヨシュア記以後の歴史書は、まさにそれを確認するような歴史なのです。その最後の災いが、今から入る約束の地から引き抜かれることでした。「申命 28:63 かつて、【主】があなたがたを幸せにし、あなたがたを増やすことを喜ばれたように、【主】は、あなたがたを滅ぼし、あなたがたを根絶やしにすることを喜ばれる。あなたがたは、あなたがたが入って行って所有しようとしている地から引き抜かれる。」紀元前 1400 年頃にモーセが語ったことは、北イスラエルは紀元前 722 年に、南ユダは 586 年に起こりました。

5B 主に願わない過ち 13-14

¹³ このわざわいはすべて、モーセの律法に書かれているとおりに、私たちの上に下りました。しかし私たちは、不義から立ち返って、あなたの真理によってさとくなれるように、自分たちの神、主に願うこともありませんでした。¹⁴ 主はそのわざわいを下そうと待ち構えていて、それを私たちの上にもたらされました。私たちの神、主のなさったみわざはすべて正しく、私たちが御声に聞き従わなかったからです。

ここに、イスラエルの霊的な無関心が書かれています。主は、これらの災いを下し始められた時に、「わたしのところに立ち返りなさい」という大きな声を挙げておられました。イスラエルとユダが危機に陥っている時に、すなわちアッシリアとバビロンがそれぞれに迫って来ていた時に、預言者を数多く遣わされました。そこには、主ご自身の熱情があります。熱い心と思いがそこにはあります。ところが、肝心のイスラエル人はそれに応答しなかったのです。祈らなかったのです。預言者イザヤが、「主から、しるしを求めよ。」と言われたのに、王アハズが「私は求めません」と言ったよ

うに、です(7:11-12)。主は、平穏な時よりも、危機の時や、試練や困難の時に多くを語ってくださいます。ここでダニエルが、「主はそのわざわいを下そうと待ち構えていて」というのは、そういうことです。ご自身が下すと言われた災いに対して、強いご自身の思いや意志を込めておられるのです。そこに耳を傾けるならば、大きく神の声が聞こえていたのです。

3A 主への哀願 15-19

1B ご自分のものとされた民 15-16

¹⁵しかし今、私たちの神、主よ。ご自分の民を力強い御手をもってエジプトの地から導き出し、今日あるとおりに名を成された神よ。私たちは罪を犯して、悪を行いました。¹⁶主よ。あなたのすべての義のわざにしたがって、どうか御怒りと憤りを、あなたの都エルサレムから、あなたの聖なる山から去らせてください。私たちの罪と私たちの先祖たちの咎のゆえに、エルサレムとあなたの民が、私たちの周囲のすべての者にとってそしりの的となっているからです。

「しかし」という言葉から始まっています。罪の告白から、エルサレムの都の回復を願っています。今、エルサレムでは神殿は破壊され、そこが廃墟となり、異邦人に踏み荒らされています。それを回復してほしいと願っているのですが、これまで見てきたように彼はそれを当然の権利として主張しませんでした。もっぱら自分たちの罪のためにこのようになっていると言いました。ならば、どうして回復を願うことができるのか？それは、神の憐れみです。初めに、神の御名のゆえです。「名を成された神よ」とダニエルは言いました。「あなたの都」「あなたの聖なる山」「あなたの民」と、主ご自身の名のゆえに、エルサレムを治めてくださいと祈っているのです。

同時代に、バビロンの捕囚の地でエゼキエルがこの預言を受けました。36章22節からです。「36:22-24 それゆえ、イスラエルの家と言え。【神】である主はこう言われる。イスラエルの家よ。わたしが事を行うのは、あなたがたのためではなく、あなたがたが行った国々の間であなたがたが汚した、わたしの聖なる名のためである。23 わたしは、あなたがたが国々の間で汚したわたしの大いなる名が、聖であることを示す。あなたがたが彼らのただ中で汚した名である。わたしが彼らの目の前に、わたしがあなたがたのうちで聖であることを示すとき、国々は、わたしが【主】であることを知る——【神】である主のことば——。24 わたしはあなたがたを諸国の間から導き出し、すべての国々から集め、あなたがたの地に連れて行く。」このように主が祈りを聞いてくださるのは、一方的な憐れみのゆえであり主の御名のゆえなのです。

ここでダニエルは、出エジプトの出来事を持ち出しています。主が、大きな力を示してエジプトからイスラエルを救い出されました。同じように、エルサレムの解放についてそこを支配している異邦人の力を打ち砕いて、大きな力を示してくださいという願いです。イザヤ書51章9節以降に、エジプトから救い出してくださったことと同じように、シオンに贖われた者が帰ってくるという約束を与えてくださっています。「51:9-11 目覚めよ、目覚めよ。力をまとえ、【主】の御腕よ。目覚めよ。昔

の日、いにしえの代のように。ラハブを切り刻み、竜を刺し殺したのは、あなたではないか。10 海を、大いなる淵の水を干上がらせ、海の底に道を設けて、贖われた人々が通るようにしたのは、あなたではないか。11 【主】に贖われた者たちは帰って来る。彼らは喜び歌いながらシオンに入り、その頭には、とこしえの喜びを戴く。楽しみと喜びがついて来て、悲しみと嘆きは逃げ去る。」

2B 荒れ果てた神の聖所 17

¹⁷ 私たちの神よ。今、あなたのしもべの祈りと願いを聞き入れ、主ご自身のために、あなたの荒れ果てた聖所に御顔の光を照り輝かせてください。

次にダニエルは、エルサレムとその神殿の回復を願っています。その理由は、「主ご自身のために」という理由です。そして願いは、「御顔の光を照り輝かせてください」です。主が笑顔で快く受け入れてくださっている顔であります。主の顔があれば、そこには癒しがあります。恵みと平安があります。新しいエルサレムでは、太陽の光がないのに輝いているほど、神と小羊に栄光で輝いていることが教えられています。私たちにも、神は顔を輝かしてくださっています。ダニエルのように、へりくだった心、砕かれた心には、恵みの御顔が輝きます。

3B 御名の付けられた都 18-19

¹⁸ 私の神よ。耳を傾けて聞いてください。目を開いて私たちの荒れすさんださまと、あなたの御名がつけられている都をご覧ください。私たちが御前に伏して願いをささげるのは、私たちの正しい行いによるのではなく、あなたの大いなるあわれみによるのです。¹⁹ 主よ、聞いてください。主よ、お赦してください。主よ、心に留めて事を行ってください。私の神よ、あなたご自身のために、遅らせないでください。あなたの都と民には、あなたの名がつけられているのですから。」

エルサレムの都には、「あなたの御名がつけられている」と言っています。主は、モーセの時からご自身の名を置くところで、礼拝を捧げるようになることを言っておられました(申命 12:5)。そしてソロモンが神殿を建て、もはや移動式の幕屋ではなく、エルサレムにある固定された神殿の場所において、ソロモンは献堂式の時に、こう祈ったのです。「1列王 8:29 そして、この宮、すなわち『わたしの名をそこに置く』とあなたが言われたこの場所に、夜も昼も御目を開き、あなたのしもべがこの場所に向かってささげる祈りを聞いてください。」主がご自分の名を置くというのは、主の栄光、主のご性質がそこではっきりと現れるということでもあります。今の私たちにとっては、まさに聖霊が与えられた信者たちの集まる中に神はご自分を住まいとしておられ、キリストの栄光をお見せになるのです。

ダニエルは、最後に切実な哀願を主に捧げています。3節に「哀願をもって主を求めた」と書いてありました。「祈りと願いを聞き入れ」てください。「御顔の光を照り輝かせてください」とあり、ここでは、「耳を傾けて聞いてくださ」い、「目を開いて」ください、「心に留めて」ください、「遅らせないでく

ださい」と言っています。切に願い、大胆に祈っています。イエス様が言われた、「求めなさい、捜しなさい、戸を開きなさい」を思い出しますね。もう七十年が満ちようとしています、この機会が来ているのだから、主が顧みてくださいよう、哀願しているのです。

私たちは、ダニエルの祈りから、機会を失わない祈りを思います。目を覚ました祈りと言ってもいいかもしれません。霊的に眠っていて、まどろむのではなく、神のご計画の中に自分がどのように生かされているのかを知って、主の前にひれ伏し、哀願をするのです。私たちは、時にことばにならない祈りにもなるでしょう。そうしたうめきの祈りにも、ロマ8章によると、御霊が助け、執り成しをしてくださいます。そしてダニエルの、この祈りに対して神はすみやかに、御使いガブリエルによって答えてくださっています。それが、神の救いのご計画にとってそれを完成させる核心的な期間、七十週の幻を啓示してくださるのです。